

念でたまりません。

幸いに、二人の娘がそれぞれ良きパートナーと結ばれ、子供にも恵まれて幸福な家庭を営んでおり、高齢となった私たち夫婦の健康や生活を気遣ってしてくれます。何とか今日まで生き延びている、この幸福を感謝しているこのごろです。

夫は昨年十月に、動脈瘤が切れて三カ月入院生活を送りましたが、今は大きな変化も無く余生を送っていますし、私は狭心症の手術から五年が無事に過ぎました。加えて膝痛にも耐えながら、主婦業六十年を過ごし、今年も梅八キログラムを漬けました。何とか台所に立てることを生きがいとしています。

どうか世界中が、戦争の無い平和であること、何よりも祈っております。毎日、亡き照子にお茶を供えながら「吉林は、やっと暖かくなったでしょう」とか、「こんな姿にして御免ね」とか、仏壇に向かって話し合っています。

## 南北満州 北帰行

愛知県 三 澤 徹 志

### 一 生い立ちと家族

私が生を受けたのは、乃木將軍の詩で有名な金州城内であった。物心がついたのは関東州の東端にある貔子窩ひしかで、当時父は、日本の小学校に当たる公学堂の堂長をしていた。私は父の転勤によって旅順、そして最も多感な少年期を北満のハルビンで過ごした。見渡す限り山一つ無い大広野と、多くの白系ロシア人が住む国際都市ハルビンは、旅順とはまた異なる性格の都市であった。ハルビンで育って影響を受けた私の大陸的な気風は骨の髄まで染み込んでいて、古希を過ぎた今でも変わらない。

父母は明治の末期、郷里長野県上諏訪の農村で共に小学校の教員として働いていた。

父は日本が世界の一等国に肩を並べ、国際舞台で活動を始めた様子を見て、将来はさらに発展を遂げていくであろうから、このまま信州の一隅で小学校の教員として生涯を閉じるのは物足りない、ひと働きしなければと若い血潮を燃やしたに違いない。

日露戦争が終わって約十年経ち、第一次世界大戦が始まろうとする大正初期に、父は新天地、中国大陸に活躍の場を求めて旅順旧市街の日本人小学校に勤務することになった。父は後に旅順から金州に転任になったが、終戦を迎えるまで金州で日本人子弟の教育に専念した。父は子弟はもちろん父兄にも慕われていた。

父が旅順に渡ったとき、一家は長男と次男の四人で、金州で姉と私とが生まれて六人になった。私は故あって中学校三年生の初めに、ハルビン中学から大連二中に転校した。

## 二 旅順高校文科を選ぶ

やがて私は受験の時期を迎えた。昭和十九（一

九四四）年、四年終了で進学するに当たって心が揺れた。滑り止めに受けたハルビン工大（日本の旧制高専）は理科であり、徴兵時期の延長が認められていたし、親元に帰れるなど条件が良く魅力が大きかった。

しかし私は、好条件のために軍関係の学校か、さもなくば理科をという御時世に反感を感じ、あえて損な役回りを選ぶ人間がいても良かろうと、旅順高等学校文科乙類に決めた。甲は英語、乙はドイツ語専攻であった。乙を選んだのは、敵性語である英語を嫌った当時の風潮が多分に影響していた。

その年から文科は甲乙併せて四十人の一クラスだけになった。制服は、乙型国民服に戦闘帽と決まっていた。あこがれていた白線帽をかぶれなかったので生徒たちはかなり反発していたが、ハルビンでは関東軍の影響力が強かったためか、中学校のときから制服は国防色の折り襟、帽子は戦闘帽、脚半を巻き木銃を担いで登下校していたか

ら、ごく普通に思っていた。

### 三 勤労働員の明け暮れ

入学して落ち着く間も無い四月末から勤労働員が始まり、最初は水師營に程近い土城子で海軍の飛行場建設工事にかなり長期従事した。滑走路を造るために土を運ぶ作業は辛かったが生活環境は良かった。広々とした兵舎にゆったりと寝泊まりでき、食事は三度三度腹いっぱいになるほど食べ、おやつまで出た。海軍の係官は親切で細かいところまで気を遣ってくれ、過度な労働を強制することも無く、皆のびのびと作業して、夜は楽しく団らんするときを過ごした。

七月に繰上げ卒業の三年生を送り出すと、今度は大連と旅順の間に面した凌水屯で陸軍が建設する造船ドック建設に従事した。なぜ陸軍が船を造るのかと思つたが、日本内地の食糧不足を補うため、まだ余裕のある満州から輸送するのが目的ということであつた。鉄が払底しているために鉄筋コンクリート船を造るというのも陸軍が考え

たことだとは、戦後に聞いた。作業内容については、家族にもしやべつてはならぬと口止めがあつて、秘密のうちに作業が進んだ。

大雨が降れば浸水するような板張りの三角兵舎に寝泊まりし、毎朝トウガンの実が入つた薄味の汁と握り飯、夜は太刀魚の煮付けばかりであつた。海軍とは余りにも違う粗末な食事で、地表から十数メートルも深く掘り下げ、掘つた土をトロツコで運び出す重労働が炎天下で続くのだから、体もたえず倒れる者も出る有様であつた。

私は幸か不幸か、結核感染反応が陽転したばかりだったので炊事班勤務になつたが、重労働をしている者が貧しい食事しかできないというのは辛いことであつた。しかし、若いときに鍛えたお陰で体力と忍耐力が養え、今になつても元気なのはこの重労働のお陰といえるかもしれない。

年が明けて昭和二十年、同級生のうち満十八歳になつた十五人が徴兵検査を受けた。三月には修業年限が二年に短縮された上級生が繰上げ卒業

し、一年のうち理甲という理学、工学専攻者は勤労動員で大連に行き、全寮制の寮には文科と理乙という医学、農学専攻の八十人が残るだけとなった。

五月、ドイツが連合国に降伏したところ、徴兵検査に合格した級友が相次いで入営していった。

六月に入って私たち昭和二年生まれで満十七歳になった者は、文科、理科の区別無く全員徴兵検査を受けた。内地も、満州や朝鮮も理科系は満十八歳まで徴兵猶予のほゞであったが、旅順・大連地区の軍部だけが取った繰上げ取扱いであった。

間もなく、寮に残っていた者全員勤労動員で、大連にあった満鉄中央試験所に行った。満鉄中央試験所は大勢の優秀な技術者をそろえ、膨大な予算と最新の設備をそろえて工業化試験を行うほか、物理や化学などあらゆる面にわたる研究を行っていた。

私はどういふ訳か肺結核の特効薬研究開発グループに入ったが、もちろん何の貢献もできるは

ずはなかった。幸い理乙の級友がパートナーになったので、彼を頼りにお茶を濁していた。研究室長佐竹さんが非常に話せる人で、休憩時間にはいろんな話を聞かせてくれたり、エチルアルコールにお手の物のサツカリンを混ぜて甘みを付け、私たちに振る舞ってくれた。酒など手に入らない戦時統制下であったから、楽しい思い出として残っている。

研究室は、八月の初めには結核の特効薬を完成した。佐竹室長は資料をまとめて報告書を作り、発表するばかりになっていた。報告をもう少し早く発表していたら、パスヤストマイに先んじて世界にセンセーションを巻き起こしたと思うと惜しい気がしてならなかった。蛇足であるが、報告書の関係者欄には、何の役にも立たなかった私たちの名前まで書き入れてくれていた。

#### 四 第二国民兵、急に召集

八月九日、ソ連兵が突然満ソ国境を侵攻して来た。八月十二日は日曜日で、中央試験所も休みで

あった。昼食を済ませ外出しようと靴のひもを結んでいるところへ、電話がかかっていると知らせてくれた。何かと電話に出てみると「君に召集命令が来ている。令状を届けている暇がない。すぐに支度をして四時までに奉公袋を持って大連駅に集合するように」との慌ただしい連絡であった。ソ連軍の侵攻で「関東軍百万国境線に」という新聞記事を見たばかりなのに「まさか」という気持ちと「やっぱりきたか」という複雑な気持ちで支度にかかった。

大連駅の指定集合場所はごった返していた。同級生はもちろんのこと理甲の者も高専の連中もいた。中には映画館の中にまで呼出しがかかって、下駄履きのままの者もいた。今日の召集は昭和二年生まれの者、全員であった。ほかに集まっていたのは四十歳を過ぎた予備役の人たち、いわゆる「赤ベタ」の第二国民兵であった。これがソ連の侵攻に対して関東軍が打った最後の手であった。

駅には何十両もの有蓋貨車が待機していた。集

まった者は行き先別に分かれ、私と植木、香川、片山、佐々木の五人は四平から南西の満鮮国境に近い炭鉱の街、西安に行くことになった。五人はいつも一緒に行動した。

私たちは十数両連結の貨車にすし詰め状態で乗った。貨車は扉を閉めてしまおうと空気が通らないから、人いきれでむんむんする中でひざを抱えて座ったきり、横になることもできなかった。列車はときどき停車したが、一路北進し目的地の西安に着いたのは十四日の夕暮れであった。

西安の部隊に着いてみると、少尉一人と下士官以下数人が留守を守っているだけで、千人を超える召集兵が来ることも知らず、受入れ態勢など全く何もできていない状態であった。私たちが持つ武器弾薬はおろか軍服も無く、急な召集で大連駅に集合したときの服装のままだから、全く雑兵以下の状態であった。

宿泊場所も足りなかつたので、空いている日本人国民学校を利用することになった。教室の机、

いすを全部外に出し、床に毛布を敷いて雑魚寝であった。幸い夏で良かったが、真冬の寒さにはどうにもならなかった。寝るところの準備はできたが、夕食は茹でたジャガイモ二個だけであった。

翌十五日の朝からは、有り難いことに国防婦人会の人たちが炊き出しに来てくれて、握り飯が二個ずつわたったのを覚えている。今日十五日の昼に重大放送があるというので全員が校庭に集合し、指揮台の上にラジオを据えて拡声器で放送を聞くことにした。放送は雑音がひどく何を言っているのかはつきりしなかったが、断片的に「堪え難きを堪え、忍び難きを忍びうんぬん」という言葉が聞こえたので、今後も頑張れという励ましに違いないと解釈した者がかなりいた。

日本が負けるはずがないと思いついでいるから、部分的に聞き取れた言葉から励ましと結論付けたのであった。私も負けるはずがないと思いついでいる口であったけれども、聞き取れた言葉と、放送全体の雰囲気からすると、どうしても

勝ったとは取れないものがあつた。負けたのだという組とそうではないという組の両者がそれぞれ意見を戦わせたが、ポツダム宣言を受諾して日本は敗れたのだと結論が出て、放心状態になる者、悲憤の涙を流す者など、教室の中は異様な雰囲気になつた。異様な状態は永く続いた。

受信状態が悪かつたのは距離が遠く電波が弱いせいかと思つていたが、帰国してから聞いた話では満州へは特に強力な電波を使ったということであつた。

放送があつたときにソ連兵は西安の二十キロメートル先まで侵入していたということはあとで聞いた。玉音放送がもう少し遅かつたら、私たちの命はどうなつていたか分からない。玉音放送が紙一重の差で私たちの命を救うことになつた。しかしまだ安心はできなかった。夜、西安の炭鉱でもあちらこちらで中国人の暴動が起つたので、いつここが襲われるかと不安な一夜を過ごしたが、幸い何事も無く朝を迎えた。

ある日ソ連兵が、疲れきった様子 of 現役兵の一隊を連れて入って来て、武装解除し、どこかへ連れて行った。恐らくシベリアへ連行していったのであろう。

そうこうしていたときに、師団長が独断で召集解除の命令を出したという通達が届き、教室にいた予備役の召集兵たちはじめ全員大喜びで、とにかく活気づいた。年配の召集兵の中にいた元満鉄の機関士やボイラーマンが自前で有蓋貨車をかき集め、列車を編成して全員大連への帰途に着いた。

西安に来るときと同じ貨車の旅であるが、敗戦で中国人との立場は逆転している。中国人の暴動や、どこまで侵入してきているのか情報もつかめないソ連軍によって殺されるかもしれないという受身のときの恐怖は、任地に向かう積極的な立場で覚悟した死に対する恐怖とは全く異質のものであった。

貨車にはトイレが無いから、途中で休憩が必要

だが、やたらなところに止まるといつ襲撃を受けるかも分からない。夜、人気の無い荒野に停車したが、遠くからドラの音が聞こえてくる。さては八路軍の襲撃かあるいは中国人の暴動かと思った。私たちは武器は何も無いから、全員貨車から降りて線路に敷いてある砂利をポケットに詰め込み貨車の下に伏せて待機したが、幸い何事も起こらなかった。

翌日、駅に入って停車したところでソ連兵に捕まった。マンドリンを構えて「ダワイ」と叫ぶ。扉を閉め切って空貨車のように見せかけたのを怪しんだのだ。機関士の機転で、いったんスピードを落として止まると見せかけ、ソ連兵が油断したところを見計らってスピードを上げて逃げた。ソ連兵はマンドリンを乱射したが、幸い乗員には損傷は無かった。

さらに南下して鉄嶺駅まで来て、ついにソ連軍にストップを食らった。鉄道列車は奉天を中心に百キロメートル範囲では一切運行停止の命令が出

ているとのこと、駅には私たちと同じ召集兵や避難民の列車がぎっしりと詰まっていた。いつになつたら出発できるのか皆目見当がつかない。

食物の配給がある訳もなく、じつとしてもられないので、仲間五人と街へ食糧を買いに出かけた。駅の周辺は比較的治安も良く、落ち着いていた。途中五人の日本婦人に出会った。トランクなど重そうな荷物を抱えていたので、大変だろうと荷物を持ってあげることにした。道すがら話を聞いていると、彼女らは軍属の夫人であった。御主人たちはどこにいるのか分からないし、まだ帰って来ないので、女一人だけで自宅にいては物騒だからと国民学校で集団生活をしていたが、ようやく落ち着いてきたようだから家に帰るところだという。「男がいなくて心細いから是非家に来てくれ」と言い、一行の中で年配の人の家を訪ねることになった。ほかの夫人たちも一緒になつて私たちを歓待してくれた。

五人は味をしめ、折を見て貨車を抜け出しては

ごちそうになった。こうした毎日であったが状況は一向に進展せず、しびれを切らして徒歩で南下した者も何人かいたが、途中で暴徒の危害に遭うなど、無事日本に帰り着いた者はほとんどいなかったようである。

列車の運行が再開されて、軍属夫人とも別れのときがきた。列車は走つたり止まつたりを繰り返しながら、大連にたどり着いたのは九月に入ってからであった。

大連に着いて西安以外の地区へ行った連中に出会つたが、彼らは被服や軍靴、それに食糧までたくさんもらつており、しかも順調に大連に帰つて来たらしいから、ひもじい思いや難儀をした西安組が一番貧乏くじを引いたようであった。

振り返ってみれば、金は一銭もかからなかったが、常に死と隣り合わせの際どい旅であった。私にとつて空前絶後の貴重な人生体験になった。師団長の決断のお陰でシベリア行きも免れたし、もう恐れるものは何も無いと腹が据わつた。今思い



返しても、よくまあ今まで命がつながっているものと不思議なくらいであった。

後に分かったことであるが、私たちのように満十七歳で徴兵検査を受け召集、満州の国境線防衛についたのは、関東州の旅順・大連地区在住者だけであった。七月に入學した一年生で昭和二年生まれのものも、満州の他の地域の生徒はやはり徴兵検査を受けておらず、当然召集を受けていなかった。

## 五 敗戦直後の大連

やっとの思いで帰ってきた大連にも既にソ連軍は進駐して来ていた。シベリアの囚人部隊だというもっぱらのうわさで、腕に入れ墨を彫った兵隊が多かった。特に時計や万年筆を欲しがり、道行く人を「ダワイ」と脅して巻き上げ、巻き上げた順にいくつもの時計を腕に着けて得意そうにしていく兵士をよく見かけた。

皆戦々恐々として息を潜めているばかりであった。彼らは略奪、暴行など日常茶飯事であったか

ら、若い女性などは髪を切って男装したり、家に侵入して来たらすぐ身を隠すように絶えず気を配っていた。生きた心地がしない毎日だった。

男も、争って勝てる相手ではないから戦闘帽のひさしを取ってしまつてソ連兵の帽子に似せたり、胸に赤い布を付けてシンパのように見せかけたりしてなるべく目立たないようにしていた。街のあちらこちらに赤旗が立っていたが、旗だけでなくやたら赤い色が目立つようになった。

## 六 旅順高校のフィナーレ

進駐して来たソ連軍は旅順に完成したばかりの鉄筋コンクリート造りの旅順高校を真つ先に接収してしまつたし、図書館の蔵書はパン焼きの燃料にしてしまつたという話を聞いた。私たちは在校生中随分貴重な書籍があつたのを見ていただけに惜しい思いをした。

さらにソ連軍は旅順に居住していた日本人に、旅順からの退去を命じ通過することも禁止した。旅順の寮の一年生も大挙して大連に移動して来

た。学校は旅順から、一年生と前から大連にいた学生に登校するように連絡を取った。登校した学生は全員講堂に集合、教頭が涙ながらに旅順高等学校の廃校を告げ、一人ひとりにガリ版刷りの在学証明書と卒業証明書を渡した。日本に帰ってから再び学業を続ける者は在学証明書を示して学校に編入をさせてもらうように、また勉強を継続できない者は卒業証明書を生かして職業に就けるように、という趣旨であった。

皇紀二千六百年にできた旅順高等学校はわずか五年をもつてあつけなく廃校になってしまった。

私たちのクラスは日本に引き揚げることになったが、脳裏から離れないのは、五月に現役入隊して東寧最前線の防御についた上級生が、さまざまに戦闘の末戦死三人、戦病死一人、シベリア行き七人という、たった一年早く生を受けたために運命の明暗を分けたことであつた。

先生の中にも私たちよりも早く召集を受けた人は多く、戦死、戦病死した方も何人かおられた。

## 七 大連での生活

立場が逆転して、今まで威張りくさっていた日本人が途端に卑屈になってしまった。中国人が一人の日本人を後ろ手に縛り、胸にプラカードを掛け、三角帽子をかぶせて街中を引き回した上、広場の壇上に立たせ大衆の前で男の罪状を読み上げ、集まった大衆に判決を問い、大衆は一斉に「銃殺！」と叫んだ。

企業内でも、中国人が日本人を使うようになった。失業者も増え生活も苦しくなる。繁華街の道ばたには、衣料や家財などをごぎの上に並べて売る日本人がどんどん増えた。旅順はもとより、奥地からの避難民が続々と大連に集まって来たのだから当然である。

私たちの仲間ももちろん同様であつた。いろいろと知恵を働かせてヤミ商売を始める者もいた。私は売ろうにも金目の物は何も無いし、商売を始めようと思つても元手になる金が無かつた。

幸い、父が昔懇意にしていた阿南という方が大

連ドックのかなり地位におられたので、就職を頼んでドックで働くことができるようになった。日本人はみんな現場に出て中国人の下で働いていたが、私は阿南さんの口利きもあって総務の事務職に回してもらい、厳冬にも暖房の効いた室内でぬくぬくと事務を執ることになったのは有り難かった。

## 八 单身ハルビンへ

敗戦の混乱以後、両親と姉のいるハルビンとは電話は通じないし、郵便などの業務はストップしたまま、新聞も発行を中止しているから消息は全く分からず、私は三人の安否を気遣うばかりであった。

うわきでは、中国人が奥地の日本人を皆殺しにしたとか、暴動を起こしてハルビンの日本人の家をほとんど壊してしまったり、悪いことばかり伝わってきたが、確かめに行くことなど思いも及ばないから、ただ心配するだけであった。

年が明けて昭和二十一年、風の便りというか、

中国人に変装して大連とハルビンを往復し、日本人の手紙を取り次いでいる人がいるという話が伝わってきた。もぐりの飛脚商売である。中国人に成りすまして飛脚ができるなら、私もやってみるかという気になって準備にかかった。変装がばれたときのことも考えておかなければならないから、捕まったときに釈明に役立つ証明書が必要だと思った。

大連ドックはソ連軍の管轄下であり、コズロフ中将が監督官として君臨していた。上司である総務部長を通じて、コズロフ監督官に「父親が危篤との連絡があったので、見舞いのためハルビンまでの旅行証明書を交付してもらいたい。必ず帰って来るから」と頼み込んだ。いまだきハルビンから連絡などあるはずが無かったが、監督官も事情には疎かったと見え、首尾良く許可書を発行してもらった。発行してもらった証明書を持って八路軍の大連市公署に行き、同じように頼み込んで旅行証明書を手に入れた。ソ連軍の証明書をもとに

して八路軍を納得させた訳である。占領軍としてソ連軍が幅をきかせてはいるが、何といつても八路軍は中国では根強い勢力を持つているから、八路軍の証明書はものをいう。まあ両方の証明書を保持しているのだからまず心配は無かった。そして二十一年二月、ついに北帰行を決行した。極寒のときであつた。

荷物検査も無事に通過、列車に乗り込んだ。中は中国人で満員であつた。後ろの出入口近くにやつと席を確保することができた。かつて快速を誇つたアジア号はもう運行してないから、列車はすべて鈍行で、ハルビンまで一昼夜以上かかるのみなければならなかつた。先を急ぐ身に列車の動きはもどかしく、景色を眺めるどころではなかつた。

やつと見覚えのある景色が目に入ってきて、懐かしいハルビンが近いなとほつとしていたら、前から銃を持った八路の兵士が二人入つて来た。ついにおいでなすつたか！ 案の定「日本人が乗つ

ているはずだ」と怒鳴る。乗客の中には私をにらむやつがいる。だれかが密告したに違いない。どうせ黙つて押し通せるものではない。名乗り出た。

やつて来た八路は、中国人乗客の見ている前で私の荷物を全部ひっくり返して調べながら、いろいろ尋問を始めた。そこで二枚の証明書を見せ、親の病氣見舞いのために証明書をもらつてハルビンに行くところだと説明した。今度は「お前はどこで中国語を覚えたのか」ときた。「おれは中国で生まれ育つた。中国の土地に慣れ親しんでいる。親しい友達もたくさんいる」と言つたら、やつと納得した。やれやれであつた。

ハルビン駅に降り立つても足が地に着かない。果たして両親と姉は無事であろうか。元の家にたどり着いても、だれもいなくなつたり家が無くなつていたらどうしようかなど、悪いケースばかりが頭に浮かび、足の運びも重くなつた。

ついに、やつとの思いで家にたどり着いた。家

は無事だった！ 両親も姉も健在だった！ 私にとつて一世一代の大冒険を無事終えた感激は言葉には表せなかった。

落ち着いてから聞いた話によると、父が、日本人を一人引つ張り込んで来たら幾らという、金目当てで日本人を誘拐する中国人に「日本語の通訳が必要なのは非来てもらいたい」と言葉巧みに誘われ、すんでの所で乗るところだったが、母と姉の機転で金を握らせことなきを得たという。ほかにも再三命に関わるような危険な目に遭ったということであつた。

また、我が家から南百メートルくらいから先の日本人家屋は、跡形も無く壊れていた。我が家は際どいところで助かっていたのだ。大連で聞いた情報も、例の飛脚などを通して、奥地の情報として伝わっていた訳である。

## 九 ハルビンでの半年

無事であつた両親のところへ帰つて、久しぶりにぐつすり眠れた。しかし、ふと目を覚ますと遠

くの方で「わーっ」という海鳴りのような音が聞こえる夜もあつた。気のせいかもしれないが、暴徒がいつ襲ってくるか分からないという不安は絶えずつきまとつていた。

忘れられないことが起つた。国境に近い開拓地から命からがら逃げ帰つて来た人たちが、母校花園小学校に入つて来たのだが、父たち地元の人が助けようにも食糧、医療品の余分など無く、栄養失調で倒れる人が続出するなどまさに地獄絵図のようであつた。

## 十 母国への旅立ち

昭和二十一年八月、引揚げの情報が入つた。私たちはどれだけ待ちこがれたことであろう。必要最小限の物をえりすぐつて母の手作りの特別大きなりユックサックに詰め、両親や近所の人たちと一緒にハルビンの駅に向かつた。駅で待ちかまえていたのは携帯品の検査であつた。検査員は中国人中学校の生徒たちで、引揚者の男性組には男子生徒が、女性組には女子生徒が検査に当たつた。

そして、大事に持って来たなげなしの物の中から、検査員が気に入った物を片っ端から取り上げってしまった。

姉は、踏ん切りがついたとか荷物が軽くなつてよかつたとか言っていたが、内心悔しかつたのではないかと思つた。両親は姉のように簡単にあきらめかねるものがあつたに違いない。三十数年、満州の生活で積み上げた物の中から、是非持つて帰りたいと大事にしていた物もあつけなく取り上げられた。両親のショックは計り知れないと思つた。同行した引揚者の人たちからも同じように取り上げていた。

私たちが乗つたのは貨物列車であつた。だが、ハルビンと長春の間を流れる第二松花江の手前で列車が止まつた。列車から降りて確かめると、戦に負けて撤退する八路軍が国府軍の進撃を阻止するために鉄橋を爆破したのであつた。私たちは船で渡らなければならなかつた。

河原で八路軍の兵士が演説を行った。「川の向

こうは国府軍が支配している。おれたちはお前たちを紳士的に帰国させてやるが、向こう側に渡つたら国府軍が何をするか分からんから覚悟しておれ」と恩に着せ、「大事にしてやつた代わりに女性を何人かおいて行け」と難題を持ちかけた。大した紳士であつた。私たちが残る、と申し出てくれた女性がいたお陰で私たちは無事河を渡ることができたのだが、残つて犠牲になつた女性たちは誠に気の毒なことであつた。

国府軍の受入れ演説は「皆さんは八路軍の圧制のもとで苦労したことであろう。私たちは紳士的にあなた方を送還するから安心するように」ということであつたが、長春（新京）で一週間余り動けなかつた。しかも野宿であつた。貨車に乗つてしばらく進んではまた一週間の野宿ということの繰り返しであつた。無蓋貨車は台車の囲いを乗り越えて乗り降りしなければならぬから、老幼婦女子の乗降には男たちが手伝つた。私も両親や周りの人たちの手助け役を務めた。貨車にはトイレ

は無いから、婦女子は難儀だったが手伝う男性もまた大変であった。雨が降っているときなどたまつたものではなかった。

列車が通れなくて、かなりの区間を歩くことも何度かあった。リュックサックの重みが肩に食い込むのを我慢して、黙々と目的地に向かつて歩いた。道中食糧をもらえる訳ではないから自前で賄わなければならぬ。よくしたもので、行列を目当てに中国人がふかしたサツマイモやリンゴ、ナシなどを売りに来た。足元を見て、値は驚くほど高い。長春辺りまでは持つて来た金があったので買えたが、あちこちで止まっているうちに使い果たしてしまつた。

仲間同士でなにがしの現金を得るために商売を始めた。私はバリカンとかみそりを持つていたので床屋を始めたが、道中が予想外に長期化したので結構役に立つて喜ばれた。私も現金が入つて助かつた。

乗船地、葫蘆島コロトウに着くまでみんなへとへとに

なつていた。葫蘆島でまた足止めであつた。次から次と集まってくる引揚者で収容所はいっぱいになり、船が追いつかなかつた。

ハルビンを出発してから既に一カ月、九月も下旬になつてしまつた。待機中に二十歳前後の独身男性は使役のために残留せよというお達しがあつて、私も候補に挙がつたが病弱の老親を連れているので、と頼んでみたら幸い除外してくれた。

一週間経つてやつと乗船の順番がきた。私たちが乗ることになつた船は老朽して赤さびだらけの貨物船で、そこに乗れるだけ乗せようというのだから貨物同様、すし詰めであつた。

船内での食事は一日二食で、出るのは貝のむき身を煮込んだアワの雑炊ばかりで、おまけに生煮えとぎえているからひどく消化が悪く、元々衰弱していた胃腸が堪えきれず下痢する者が続出し、トイレにはいつも行列ができていた。雨の日は甲板にあるトイレから流れ出した汚物が雨水と一緒に流れて一面に広がるので、並んで待つている人た

ちはたまったものではなかった。

いろんな苦勞を重ねてやっと日本へ帰る船に乗ったというのに力尽きて亡くなる人が出て、その度に水葬を行った。みんなどうにもやりきれなくなるのであろう。気が立っているのか、わずかなことでけんかになり狭い船内あちこちが修羅場になった。

待望の九州が見えてきた。緑の山々、山すそに点在する漁村、初めて見る祖国の風景は殺風景な満州と違っていかにも美しかった。やっと佐世保港に着いたのに、検疫のためにすぐに上陸はできなかった。散々いらいらした挙げ句、上陸できたのは葫蘆島を出港してから十日も経っていた。上陸したふ頭で頭からDDTをかけられて、体中真っ白のまま入国手続きを済ませてやっと列車に乗った。

郷里の信州にたどり着いたのは二十一年十月、もう部屋にはこたつが入れてあった。真夏にハルビンを出て五十日あまり、難行苦行の旅であつ

た。何はともあれ両親共々命を永らえ、無事に故国の土を踏めただけでも良しとしなければならぬ。

#### 十一 祖国での生活

末っ子であつた父には郷里であつたが、帰るべき家は無かつた。幸か不幸か長兄が茅野で写真館を営んでいたので、私たち四人はひとまず長兄のところに落ち着くことになった。しかし長兄にも私たちが養う余裕は無かつたので、私が仕事を探すことになった。いとこの紹介で上諏訪区裁判所の給仕として務めることになり、なにがしかの足しになった。姉も仕事を見付け必死で働いているうちに、父の友達が世話してくれた岡谷市の借家に四人水入らずで住むことになった。

明けて昭和二十二年の春、大連からの引揚げが始まり、次兄夫婦も無事帰国でき、岡谷の住まいに合流した。

裁判所の給仕ではと思つていた私は、三月に旧制松本高等学校の「引揚げ復員学徒編入試験」を



受験、文乙二年に合格することができた。勉学を続けなければならぬ。両親は働く気力も体力も無くしていたので、本来は私が働いて一家の生活を支えるべきなのに、学業を続けるのは心苦しかった。

両親や姉には生活費や学費は自力でやるからと説得して賛同を得た。姉が「私が働いて両親の面倒を見るからあなたはしっかり勉強しなさい」と、私を励ましてくれた。

松本の学校に入ってみると、木村校長が私に温情あふれる慰めと励ましの言葉をかけてくれ、担任の狩野教授も引揚者に理解のある方で、親切に受け入れてくれた。西も東も分らない土地へ単身で乗り込んだ私にとって、先生方の温かい励ましほど心強いものは無かった。先生方の御指導で育英資金の借入れ、授業料免除も受けられることになった。

奨学金とアルバイト収入だけが頼りの自活生活が始まった。アルバイトはガリ版切りの筆耕であ

る。字を書くことには自信があったし、当時は教科書が不足していたので、各教授からテキストを拝借しては原紙を切り、謄写印刷して学生に買ってもらった。他にも学業の合間にできることは何でもやった。

三十数年間かかって築き上げたすべてを失った父の失意ぶりは、はた目にも気の毒であった。帰国一年目に病を得て世を去った。

私は一浪したが、旧制として最後の学生として名古屋大学に入学することができた。学資、生活費を得るために、大学生協を通じてテキストのガリ版切りが始まった。

さらに松本高校の級友に紹介された新制中学校の人見校長のお世話で、書道クラブ講師という思いがけない職に就けた。中学生を相手にクラブ活動に打ち込んだりして、楽しみながら何とか旧制の最後の大学生として卒業することができた。

## 十二 お陰様で感謝の毎日

朝鮮動乱後の不況が見舞っていた上、新制・旧

制の学生が同時に卒業するというかつてない就職難の年で、父を亡くした引揚者とあつては、どこかの企業からも採用の声はかからなかった。人見校長が親身になつて心配して下さり、総合商社の経営に参加しているかつての教え子に頼み込んでくれたお陰で、やっと就職することができた。

会社に提出した履歴書の文字が気に入つたのか、私の配属先は秘書課であつた。転勤した先々でも毛筆書の仕事がついて回るようになってきたので、小川竹城師に就いて正式に書道を習うことになった。小川先生もまた素晴らしい方で、お陰で商社を定年退職してからも、カルチャー教室の書道講師として地域社会のお役に立っている。

今は子供二男一女、それぞれに所帯を持ち孫七人の祖父として感謝の毎日を送っている。

父のあまりにも早い他界については今も悔いが残るが、母が八十の坂を越えるまで生きながらえてくれたのがせめてもの慰めであつた。さらに長兄は卒寿を、次兄は傘寿を、姉は喜寿を、私は古

希を迎えなお健在でいられることは何とも有り難いことである。徴兵適齢期の男子三人が、一人も戦争の犠牲にならなかつたのは、奇跡に近いことであつた。

思えば、今までに何度死線を乗り越えてきたことか。危険に遭う度にいろいろな方のお陰で今日の自分があると思う。余生は残り少ない。当時お世話になつた方々への恩返しはもはや叶わぬが、代わりに、ささやかでも郷里の方たちのお役に立つことで償いたいと思う昨今である。

## 難民流浪の三〇〇日

兵庫県 戸城 輝 一

### 一 混乱の幕開き

今、突然に第三者から、「今住んでいる所を、今日の何時までに空けて、この街から出て行け。それに従わなければ命の保証はしないぞ！」と言